

月刊

地域保健

10
2009

●特集

地域で取り組む
働きざかりの「うつ」対策

●FACE2009

沖 壽子さん

日本赤十字看護大学 地域看護学教授



学生の関心、自らの願い。積み重ねると動き出す
未知のフィールドを切り開く達成感



日本赤十字看護大学地域看護学教授 沖 壽子さん

photographs Sei Kamiyasu

後期高齢者医療制度の行方をはじめ、新政権による保健・医療政策の展開が注視されています。

国や自治体による「がん対策」も、かつての国政の中枢部が国民の健康課題に密接にかかわり積極的な取り組みが展開されるようになつた一例です。その背景には、喉頭がんに罹患し、昭和40（1965）年8月に亡くなつた池田勇人元首相の存在がありました。

がん検診事業を47（72）年10月に開始した、財団法人東京都がん検診センター（現・財団法人東京都保健医療公社東京都多摩がん検診センター）で初代係長保健師を務められた日本赤十字看護大学の沖壽子先生に、近況などお話を伺いました。

開始当初から保健師の力が發揮されたがん検診

先生は東京都の保健所保健師としてキヤリアをスタートされましたが、都のがん検診事業に参画された経緯についてお聞かせください。

都の保健所^{*}には5年間在籍しました。活動が軌道に乗り、手応えを感じ始めたころ、都の衛生局公衆衛生部成人病課に異動になりました。

この当時、池田勇人元首相が喉頭がんに罹患して逝去されたこともあり、

都ががん対策に着手した当初です。成人病課が担当し、都の「がん検診センター」設立を目指すことになりました。この準備段階の課題は、啓蒙、早期発見からフォローアップまで、すべて保健師によるシステムをどうつくるかというものです。

都では当時、胃がん集団検診車で検診をしていました。精密検査対象者の受診率が低く、この問題を解決するため都の保健所の保健師にアンケートを取つたところ、経済的負担が理由の一つと分かりました。そこで、診断が

沖 初代所長に国立がんセンターの市川平二郎先生が就任されました。実際の業務では、がんの確定診断が出たご本人とご家族に同席して医師から説明を受け、その後、改めて説明していました。相談も受けました。

確定するまでの精密検査の無料化が都議会に諮られ、実現しました。

この問題が解決した後、受診者に保健師がよくオリエンテーションしている健所と、事務職だけで運営しているところに受診率の差が出始め、最初に保健師がかかわることの重要性を実感しました。

普及前のがん検診にこのようなかた

ちで従事し、4年半在籍した成人病課から財団法人として完成した東京都がん検診センターに初代係長として赴任しました。

ーがん検診センターでは事業をどのように進められましたか。

沖 初代所長に国立がんセンターの市川平二郎先生が就任されました。実際の業務では、がんの確定診断が出たご本人とご家族に同席して医師から説明を受け、その後、改めて説明していました。相談も受けました。

* 特別区に移管される以前

地域で
取り組む

働きざかり の「うつ」対策

p16 働きざかりの「うつ」の現状と動向

京都文教大学 島 悟

p23 認知行動療法を中心とした就労・復職支援

沖縄県立総合精神保健福祉センターの取り組み

沖縄県立総合精神保健福祉センター 仲本晴男

p32 合言葉は「眠ってる？」

—働き盛りのメンタルヘルス日本一を目指して

うつ自殺予防対策「富士モデル」事業による

静岡県の取り組み

静岡県精神保健福祉センター 坂本久子

p40 「うつ」による休職者に対する職場復帰支援 モデル事業

新潟県上越地域における取り組み

新潟県精神保健福祉センター 大矢政昭

p48 うつ病支援は職場に戻すことが基本

東京都立中部総合精神保健福祉センターの

復職リハビリテーション

取材・文 編集部

p54 「うつ」の家族支援

家族心理教育を中心に

名古屋市立大学 香月富士日

うつ病が増えている。

とくに近年は過重労働、雇用不安や経済苦に関係する働きざかりのうつ病と自殺が大きな問題となっている。

勤労世代のうつ病は

産業保健の問題として取り上げられることが多いが、
うつ病による休職・退職者が増加するなかで、

地域においても産業保健との連携の取り組みが求められている。

特集では復職支援をはじめとした

勤労世代の地域のうつ対策に
スポットを当てる。





小泉今日子さん

こいすみ きょう
甲州市福祉保健部健康増進課
文・写真 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

顔と名前はすぐに覚えてもらいました

1年目から多くの事例を担当



山のある風景が好き。だから地元で就職した



山梨県に地元住民のアイドルになっている保健師がいると聞いていた。いつたいどんな人なのだろう？ 紹介を受けて名前を見たらアイドルの意味が分かった。

「名前についてはよく聞かれますが、タレントさんと同じ名前なので、人のきつかけづくりになりますし、住民の方にもすぐに名前を覚えていただけますから、よかったです」と、ちょっととはにかみながら話してくれたのは、甲州市福祉保健部健康増進課で2年目を迎える小泉今日子さんだ。同じ山梨県の大月市出身の24歳。自宅のある大月市から勤務先のある塙山駅まで電車通勤をしており、ドア・ツードアでおよそ1時間。

「役所のなかでも1時間の通勤時間は長いほうですし、電車利用も珍しいです」

都市部と地方の違いを改めて認識させられる言葉である。

「甲州といえばブドウにワインに桃ですね」と、Yoko Kozumiは、甲州の特産品を紹介する。Yoko Kozumiは、甲州の山々を背景に、笑顔で立っている。



甲州といえばブドウにワインに桃ですね

何となくだが、これが自分の進むべき道なのではないか？ 体験だけでもやってみて納得できたら先に進めてみようと思ったのだ。

「体験は命を預かる現場ですから、となきつかけは、高校のときに経験した一日看護体験だった。

「看護体験を申し込んだ理由は、まず人と接する仕事をしたいと思っていたからです。それから、兄が子どものころから体が弱く、よく病院に通つていたので、一緒に付いていくことで医療に接する機会が多かつたのです。高校生になると、何かやるなら自分の知識や技術を使い、誰かの役に立つ仕事をしたいと思うようになりましたが、そこで思い浮かんだのが子どものころから接する機会のあつた医療職でした」

Yoko Kozumiの子ども時代は、とくに芸術系に目が向くことが多かった。小学では音楽部で合唱を楽しみ、高校ではブラスバンド部に所属していた。

「医療関係に興味を持ち始めた直接的なきっかけは、高校のときに経験した一日看護体験だった。

Yoko Kozumiは、甲州の山々を背景に、笑顔で立っている。